
書 評・紹 介

佐々木祐・平井晶子（編）

『1%の隣人たち—豊岡発！外国人住民とともに生きる地域社会—』

昭和堂，2024年6月，224ページ。

本書は、兵庫県豊岡市と神戸大学による共同事業として2019年度から2021年度に実施された「外国人住民に関する調査研究」をもとに執筆された書籍である。この調査は、豊岡市における外国人住民の生活実態を包括的に把握することを目的として実施された。大規模な質問紙調査（市内に住む18歳以上の全外国人住民、市内に登録されている全事業所）と詳細なインタビュー調査（外国人住民、事業所・保健所・学校・NPO法人など）から主に構成されており、調査結果は豊岡市における多文化共生に関する指針の策定に活用された。本書はこの調査結果に基づき、就労（第1章から第3章）、外国人住民の背景と現在の生活（第4章から第6章）、子育てと教育（第7章、第8章）という3つの視点から外国人住民の暮らしと、地域住民の実践を描き出したものとなっている。

序章では、住民基本台帳をもとに豊岡市における外国人住民の全体像を示し、研究の背景と調査の概要を説明している。第1章では外国人労働者を雇用する事業所に焦点を当て、量的・質的データに基づいてその特徴を明らかにしている。続く第2章では技能実習生に対するインタビューをもとに、若い外国人住民が日本で働き、生活することをいかにとらえているのかを描出している。第3章では近年転入者数が増加する日系フィリピン人に着目し、雇用機会に合わせて国内移動を繰り返す実態を明らかにしている。第4章では在留資格・職種別（「技能実習生、特定技能外国人、インターンシップ生」「元技能実習生、元インターンシップ生ほか」「国際結婚、日系人たち」）に外国人住民の背景と将来象を示し、その多様さについて述べている。第5章では技能実習生、第6章では国際結婚妻に焦点を当て、豊岡市における暮らし、家族や母国との関係、地域社会とのかかわりなどを取り上げている。第7章では保健師、認定子ども園・保育園など妊産婦・子育て家庭への支援に携わる人へのインタビューを通じて、外国人住民に対する子育て支援の現状と課題について論じている。第8章では外国にルーツがある学齢期の子どもの現状について、学校教員、外国人保護者、当事者である子ども、日本語教室のスタッフなどへのインタビューから明らかにし、「『みんな一緒』であることをよしとする日本の平等主義的な学校文化」が外国にルーツをもつ子どもの課題を見えにくくしていると指摘している。

序章で述べられている通り、全国1738の自治体における在留外国人比率の中央値は約1.1%（2022年度末時点）であり、この値は同時期における豊岡市の在留外国人比率と一致している。豊岡市の状況は、外国人の非集住地域の典型的な様子であると予想される。本書に含まれる知見、そして豊岡市と神戸大学との共同事業のありかたは、他の自治体や研究者にとって非常に参考になるのではないだろうか。また、本書は全体を通じて一般の読者にも読みやすい文章で書かれている。人口移動や外国人居住者への関心がある研究者だけではなく、これから質的・量的調査を計画する学部生・大学院生、また自治体関係者などにも広く一読を勧めたい。

（中村真理子）